



技 術 園 魂

本稿は昭和十八年六月二十四日新潟市公會堂に於て本會主催河川技術講習會席上講演せられたる時の筆記なり。(山田書記)

青 山 士

北米には昔時多くの亞米利加印度人が住んで居りました。其頃明治三十九年に桑港に起つた位の地震があつたとしても彼等の恐怖の念は吾々の想像以上に烈しかつたであらうが、彼等の受けた災害は誠に微々たるものであつたに相違ない。夫れは大地が大に震つたと云つても何にも破壊

せらるべき何の建造物もなく、只天幕が傾いたか崖崩れで數人の人が死傷した位のものであつたでありましょう。又其昔「ミシシッピー河」に四五年前にあつた位の洪水が出たと想像しても、其所の先住、即ち亞米利加印度人は「ミシシッピー」(水の父の意味)が怒り出したと恐れ慄へて、

第二卷 第八號

彼等の神様に犠牲を捧げ只管其御心を和げるにつとめなかも知れませんが、彼等は彼等の天幕と一緒に一呑負の家財、

及び家族を丸木舟へ積んで山へ避れ其所に復彼等の天幕を張り其營を續けて行つたに違ひないのであります。而して

其災害は現今の「ミシシッピー」河沿岸の都市、住宅、工場、農園等の被つた災害の何千萬分の一であつたでありませう、而し文明が進むに従つて人類は其築き上げた文明を

頼み、自然の威力に對抗せんとして種々の營造物を作り、そして我自然を征服せりと思ふのである。而し自然の威力

は現代の科擧、技術に依つては其僅の一部分を知り其極僅の一部分を變へて我等の用に供するに過ぎざるのであつ

て、其大部分は我等には未だに隠され我等が計量し得ざる程の大きさであるが故に、時々其威力により打ちのめさるゝ

のであります。即ち是れが所謂災害であるのであります。而し只夫れを恐れて萎縮すれば我等の行先は只の滅亡であります。然れども建設文明に並行して我等の上に掛り來る

幾多の試験に打勝つべく災害対策技術を進むる技術闘魂を

昂揚するならば、我等は亡び行かずして饒榮の途に進み得ることゝ信するものであります。

我邦の如き特殊の地理的位置に置かれてある國土は天變地異に曝されて居る運命にあることを深く認識して、災害

が何時來るも常に是れに備を爲し夫れに對し技術闘魂を養つて置かなければならないのであります。殊に我等河川の

河水、利水、防災の職にあるものは官と云はず民と云はず災害の豫防及び其の擴大防止に迅速果敢に技術闘魂を發揮

して平時に於ても「常在戰場」を座右の銘とし「無恃其不來、恃吾有以待之」の心構身構を以つて其職場を守

らねばならないのであります。軍人には闘魂がある。又是れなかるべからずである。是

れあるが故に大東亞戰の緒戰に於て敵米英を向に廻し、眞珠灣、マニラ、馬來沖に赫々たる戦果を擧げた。其のことに

對しては全國民は實に感謝感激に堪へないのであります。而し闘魂は軍人のみの持つものではないのである。今我等

の近くにある阿賀野川は如何に、信濃川は如何に、又常願

寺川は如何に、其他我等の手に掛けた日本の河川は如何に。阿賀野川の往古の河道は新潟市外松ヶ崎附近より砂丘に沿ひ西に流れ、今の新潟市附近に於て信濃川と並流して日本海に注ぎ、加茂屋堀により信濃川と連絡して居つたが、寛永十年(皇紀二二九三年)九月の大洪水で本流は加茂屋堀に決流して遂に信濃川に合流するに至つたのであります。爾來信濃川は阿賀野川の水を合せたが爲め、河口の水深を増加し、新潟港の繁榮を招くに至りましたが、享保十五年(皇紀二三九〇年)加治川及び本川の放水路として松ヶ崎の砂丘を開鑿しました、然るに翌十六年洪水が出て放水路の水深が増加したが爲め以後其主流が之れに注ぎ信濃川の河口即ち新潟港が淺くなつたので、航通の便を缺き港勢衰退の危機に瀕しました。其後阿賀野川の舊河道等を浚渫したけれども其效を奏するに至らずして明治年間に及び、其後内務省の直轄工事として改修工事を施行し之れによつて漸く屢々ありし水災を除去し用排水にも役立ち、其沿岸を潤しつゝあるのであります。

資 料

信濃川は記録にある水害の大なるものは元祿十五年(皇紀二三六二年)以來明治元年(皇紀二五二八年)迄百六十六年間に約二十二回の多きに及び、尙弘化四年(皇紀二五〇七年)には信濃國に大地震があつた爲め上流犀川の右岸に有名なる岩倉崩を生じ、下流の河狀を悪化したのであります。又其河口は上流より流下せる土砂の爲めに淤塞せられ先に述べた阿賀野川の河口の變遷と連關して、其河口にある新潟港の盛衰に大なる影響を及ぼしたのであります。尙中流及び下流部六日町以下新潟に至る沿岸の水災激甚なるに鑑み、信濃川分水(大河津分水)が計畫せられたのであります。夫れは日本海に近き大川津の曲を利用して寺泊、野積間の丘陵を堀割り分水路を掘鑿し其分水路を通じて洪水を直ちに日本海に放流せんとするもので、享保年間に本間數右衛門なる人により唱道せられ、其後多大の勞苦と犠牲とを拂はれたるも成功せずして遂に明治年代末葉に内務省直轄工事として着工せられ、度々の地亡等の際會せるも倦まず携まず大なる苦心と勞役と工費とを以つて大正十一

第二卷 第八號

年に通水して爾來能く分水工事所期の目的を完ふしつゝありましたが、不幸にして昭和二年六月二十四日突如として其機能を失ひました。茲に於て直ちに應急工事續いて其當時内務技師であつた故宮本武之輔氏主任の下に補修工事を起し天候、土質の惡條件に加ふるに春の雪解、夏秋の颱風と年に二度の出水の脅威の下に刻苦勉勵現代の土切機械に加へて従業員の粘り強き闘魂を以つて昭和六年六月其工を終了、新潟縣下信濃川沿岸一帯の水災を輕減せしのみならず用排水の利用に資し兼ねて新潟港の維持を易からしめ其利用を増進し時局の要求に應じつゝあるのであります。

常願寺川は天正八年（皇紀二二四〇年）の洪水後富山城主佐々成政が其左岸山間部を出離れたる大庄村地先に堤防を築造せしを初とし、元祿十四年（皇紀二三六一年）の洪水により數十ヶ所に破堤を生じ以來多くの霞堤を築造し尙明和六年（皇紀二四二九年）時の藩主前田利興が左岸大庄村地先に相當廣大なる水防林を造成して以つて洪水を防禦したのであります。尙其當時は河床低く河幅約百間の間を

流下して居つたと云ふことであるが安政五年（皇紀二五〇八年）立山山地の大崩壊により爾後砂石を流下堆積して河狀は一變し現在の如き天井川を現出するに至りました。現在には内務省の直轄工事として上流に於て砂防工事により山腹の崩壊溪流の深堀水を防ぎ土砂石の流出を抑へ下流部は改修工事を施しつゝあるのであります。

今茲に擧げた指導者施工者の名前は記録に表れて居つたもので此他多くの有名無名の工人役夫の汗と血による技術闘魂即ち失敗を経験の糧とし、百折挫けず、倒れても猶止まず、七顛八起、七生報國の闘魂によつて此等大自然との戦が戦はれたのであります。我等は我等の先驅者の足跡を見て人間の力の限界を自覺し大自然の前に自己の愚かさ弱さを覺り大自然の直接の教に傾聽して初めて技術者にはなれるのであります。併し夫れ丈では技術者にはなれないことも勿論であります。其所に一ツ闘魂を加へなければならぬ。而して殊に我等自然力を對象として働きつゝある河川技術者には最も多分に強烈なる闘魂を要するのであります。

す。私は技術闘争の人類、民族、國家の爾榮の爲めに大に
役立つたことの極大略を又我々の職域に於ける先驅者が夫
れを時に應じて發揮したことの極僅の例を御話しました。

而して「常在戰場」云ひ替へれば「常在職場」の心構如何
なる事が突發しやうとも「うろたへ」ざる不動の心構と身
構いざと云へば直ちに出勤することの出来る身構の必要な
ることも御話しました。殊に目下の非常時局下に於て世界
人類の殆んど總てが、民族の殆んど總てが、國家の殆んど
總てが其總力を盡して食ふか食はれるかの戦闘を續けて居
る今日、我等は我等の負へる責任の重且つ大なるに想を致
すと同時に夫れを誇とし喜として又我等相應に其職域に於
て經費、資材、勞力の乏しきを我等の技術、創意、工夫、
闘魂即ち技術闘魂を以つて補充補強し以つて奉公の誠を盡
すべきであると思ふのであります。

數年前私は一ヶ月餘り滿洲を旅行致しまして後北鮮より日
本海を渡り新潟港へ上陸致しまして上越線により歸京しま
した。其折に「山緑水紺碧の日の本に天つ惠の潤を見る」

資 料

と云ふ感激感謝を感じたのであります。其後世の中の移り
替りは烈しく今は大東亞戰の決戦期に入りまして此大東亞
民族復興の大聖業の實現に少しなりとも御役に立つことを
得「御民われ生るためしあり天地のさかゆる御世にあへら
く思へば」の感激を新にするものであります。是等は皆劍
を採つて此國を護りし「つはもの」のみならず我等と職を
同ふし大自然の威力と戦つて國土を防衛し此地を我等の住
み良き處となせし勇士達の賜であると思ひ感謝の念に堪へ
ないのであります。されば國民舉つて護國の英靈に對し感
謝黙禱を捧ぐる如く茲に我等職域の先驅者の犠牲勞苦に對
し感謝し且つ彼等の冥福を祈らんが爲めに尙又其靈の指
導、加護を祈らんが爲めに總員起立黙禱を捧げ度と存じま
す。

山 本 元 帥

山 秋

休言元帥化墳壘

必勝精神萬古生

青少續來山本帥

米英擊滅盜忠誠